様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2023
課題番号：２６８７０７９９

研究課題名（和文）障害者のきょうだいによる自己の語りとその受けとめ－将来の生き方に向けた支援の探究

研究課題名（英文）Self-Narratives and Their Receptions by Siblings of the Disabled: An Exploration of Support for Future Lives

研究代表者
沖潮　満里子（OKISHIO, Marko）

青山学院大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：３０７０７３１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、障害のある兄弟姉妹を持つ人が、きょうだいであることをどのように周囲に開示し、経験を語るのかをきょうだいの語りから検討してきた。結果として、きょうだいにとって兄弟姉妹のことをパートナーに伝える経験というのは、今後の人生を生きていく上でのきょうだいにとっての発達課題のようなものであると捉えることができた。そこでは自分自身が健常者でもあり、障害が遺伝することを疑われるなど差別される障害者側の人でもあるという二重性をきょうだいは意識させられていた。それでも、相手に受け入れられた際、これまで存在を隠してきた障害をもつ兄弟姉妹、そして自分のことも肯定する良い転機ともなることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
きょうだいは、自分がきょうだいであることを自分の核として捉えることもあり、障害のある兄弟姉妹が相手に受け入れられるかどうかは、自らのアイデンティティにも大きく関わるものである。この相手に自己開示したら受け入れられるだろうという相手との関係性の育ちを感じ取った時にきょうだいは開示をしていた。そこでは、兄弟姉妹のことを隠してきたことに対する、兄弟姉妹と相手への罪悪感という痛みを抱えつつも、開示して受容されたときに、その痛み以上に自分自身と兄弟姉妹の双方の存在を肯定できるということが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we have examined how people with siblings with disabilities disclose their siblinghood to their surroundings and talk about their experiences through their siblings' narratives. As a result, the experience for siblings of telling their partners about their siblings could be seen as a kind of developmental task for siblings as they live their future lives. The siblings were made aware of the duality of being both a healthy person and a person with a disability who was discriminated against, such as being suspected of inheriting a disability. Nevertheless, when they were accepted, it became clear that it was a good turning point for them to affirm their siblings with disabilities, who had hitherto concealed their existence, as well as for themselves.

研究分野：臨床心理学

キーワード：きょうだい　障害者　語り合い　インタビュー　自己エスノグラフィ　質的研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

障害者家族の中でも、きょうだい関係は一生涯続く可能性の高い関係である（Schulman, 1999）。医療の高度化により、障害者の長寿化や高齢化も進んでいる。近年は、障害者の側からみた脱家族、家族や社会からみたケアの社会化や分有が叫ばれ、障害者のケアを家族以外で担う動きがみられる。しかし、依然として障害者の入所施設は不足している。結果的に家族にケア役割が求められ、その延長として、障害者の兄弟姉妹（以下、きょうだい）が障害者をケアし、つきあう時間も増えている（Meyer, 2009）。きょうだいは、障害者の後見人となり意志決定を任される場合も多い。

先行研究では青年期にあるきょうだいがどのような経験をし、思いを抱えながら生きてきたのかをインタビュー調査によって探究してきた。その結果、きょうだいは障害を抱える兄弟姉妹に何らかの気遣いを持ち続け、自分の人生と同様に兄弟姉妹の人生を考え、障害を抱える兄弟姉妹の人生をある程度自らのものとして引き受ける「二重のライフストーリー」を生きていることが明らかになっている（原田・能智, 2012）。

しかし、これらの研究では、障害を抱える兄弟姉妹や家族との関係におけるライフストーリーの語りを中心に検討したものであり、今後はさらに文脈が広げられた社会関係の中できょうだいがどう生きていくのかという側面からの検討が必要とされている。きょうだいが抱える悩みとして上位に位置するのは「将来について」である（北村, 2008）。その中でも親亡き後の障害者の支援をどうするかという点、および自身の結婚を含めた将来全体が悩みの中心となっている。特に、家族に障害者がいることで、将来自分は結婚することが可能なのかという不安の声も挙げられる（Hodapp ら, 2010）。

この問題に向かう第１歩としてきょうだいが捉えているのが、きょうだいであることを周囲に開示することである。ライフストーリーや自己の経験を語る行為は、人生に新しい意味を生成する上で重要であり、自分の人生に大きな影響を与えた出来事は、その人のライフサイクルの中で意味が見出される時に語り始められるという（松尾,2010；やまだ,2000）。

それでは、きょうだいであることをパートナーに語り始めるとはどのようなことなのか。パートナーとの関係が深まるにつれて、自己の経験やライフストーリーを語ることはどのように位置づけられるのか等、自己の経験の語りが将来の生き方の展望に与える影響の検討は重要な課題である。

自己の語りや、自己開示を受容されることは開示者の精神的健康面において重要である（川西, 2008）。しかしながら、特に否定的な自己開示が受け手に与える影響についてはあまり検討されていない。これはライフストーリーの聴き手が受ける影響についても同じことがいえる。結婚という文脈において、共に生きていくきょうだいからの自己開示は、パートナーの人生に影響を与えることは想像ができる。そのため、きょうだいがパートナーに自己の経験を語り始めることに関する問題や葛藤の実態を明らかにすることは、きょうだいとパートナー双方の関係性や精神的健康といった臨床心理学的な観点からも有益であると考えられる。さらには、ライフストーリーや自己語りの側面において新たな知見を提示できる点で、臨床心理学的な貢献が可能となるだろう。

２．研究の目的

本研究は、障害者を兄弟姉妹にもつ人（以下、きょうだい）が、きょうだいであることをどのように周囲に開示し、経験を語るのかを当事者の語りから明らかにした上で、将来の生き方に関するきょうだいとその家族支援のあり方を検討することを目的とする。多くのきょうだいは「将来」、特に結婚に悩みを抱えており、パートナーに障害者の兄弟姉妹の存在を開示し、拒絶されることへの不安を抱えている。本研究ではきょうだいの将来の生き方に着目し、彼らが今後共に生きるパートナー等の周囲に対してどのような思いや葛藤を抱きながら自己の経験を開示し、語り始めたのか、その実態やそれに伴う問題点などを明確にする。次いで、きょうだいの自己開示や語りをどのように受けとめたのか、受け手の体験を受け手の語りから明確にする。その結果から、結婚など人生の変化に伴う障害者家族に予測される危機に対する支援の可能性を検討する。

３．研究の方法

本研究では、自己開示と被開示者、自己語り、障害者のきょうだい、といったトピックに関する文献研究を随時行う。そこで、学際的視座に基づくこれらのトピックについての理解を深め、最新の動向を追う。次いで、その成果をもとに、以下に述べるインタビュー調査を進めていく。本研究は、研究参加者の生きる世界からボトムアップに知を生み出す研究の方法として質的研究を採用する（Denzin & Lincoln, 2000）。近年、インタビューを一方向的な情報の移動の場ではなく、意味が発見される、あるいは生成・構築される創発的な場とみなす、すなわち語り手と聴き手の相互作用によって語りが共同構築されるという考え方が広まりつつある（能智, 2011）。また、研究者も自己開示する方が経験に対する洞察を深め、協力者の語りの内容を豊かにすると

言われる（Fontana & Prokos 2007）。それを踏まえ、調査方法としては、研究代表者もきょうだいである、という当事者性を生かしながら、語りを共同構築していく語り合い法（大倉，2008）を中心としたインタビューを実施する。

分析方法は、質的研究のブリコラージュを McLeod(2001)が提案しているように、その時に必要な方法を見極めながら採用していく。想定している分析方法のひとつは、「メタ観察」（鯨岡,2005）である。これは、「観察されたものについての観察・省察」であり、語りをそれが生成された状況や帰結との関係のなかで捉えるようにし、より豊かな記述を進める方法である。もう１つは、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」（Charmaz，2006）である。この方法は、既存のモデルに囚われず、新しいトピックを参加者の語りから追求するのに有益である。分析過程においては、語られた内容を整理してつなげて行く作業が中心となる。

４．研究成果

（１）研究１：研究代表者の自己エスノグラフィにおける対話者の経験を明らかにする研究

研究代表者は、きょうだいとして自身の経験を語り、研究する自己エスノグラフィ（Ellis，2004）を行なってきた（沖潮（原田），2013）。そこでは、自己エスノグラフィの新しい試みとして対話者を設定し、障害を抱える妹との関係を中心とした自身のライフストーリーを語り、それに対して継続して共同的に分析・解釈を行なってきた。この研究では、研究代表者のきょうだいとしての経験を分析したが、本研究では、聴き手であった対話者が申請者の自己の語りをどのように受けとめてきたのか、その体験を明らかにすることを目的とする。方法として、研究代表者の自己エスノグラフィを目的とした対話（計 15 回、24 時間程度）のトランスクリプトを対話者の立場を中心において分析を行なった。

その結果、きょうだいである研究代表者による、自身のきょうだいとしての経験の語りをどのように受け止め、対話者としての役目を果たしていたかが明らかになった。そこでは、対話者といういわゆる共同研究者の役割が最も大きく、第一には、研究代表者の経験の探索と自己エスノとの関わりを考えることを促す役割を担っていた。第二には、研究代表者が自身の経験を語る「今ここでの体験」を吟味することを促すという役目も果たしていた。第三は、非常に重要な役割として、研究代表者が安心して自分の経験を語ることができるよう、不安を共有したり、冗談を笑い飛ばしたりといったことが随所に見られた。対話の場を風通しの良いものにし、対等で安心できる関係性の構築を対話者側が意識していたことが明らかとなった。これは、以降のきょうだいによるパートナーへの自己開示における、パートナーの受け止め方の研究につながる結果となった（沖潮,2020）。

（２）研究 2：きょうだいの自己開示や自己語りに関する思いや経験の研究

研究２では、きょうだいであることをパートナーに開示するまでの思いや経験、その後の自己の経験をどのように語り進めたのかという点を中心にインタビュー調査を実施した。本研究の結果として、きょうだいにとって、障害をもつ兄弟姉妹のことをパートナーに伝える経験とはどのようなものか、その一端を以下のようにまとめることができた。「きょうだいとそのパートナーの間には、それまで話題に上ることはなかった「障害者」や「差別」というセンシティブなテーマが浮かび上がる瞬間となる。それと同時に、自分自身が障害者を差別する側の障害のある兄弟姉妹の存在を消してきた健常者であり、障害が遺伝することを疑われるなど差別される障害者側の人でもあるという二重性を意識させられる。これまで隠してきたことを開示することで、自分自身の立場の脆弱性が露呈される痛みを伴う経験にもなる。その一方で、相手に受け入れられた際、これまで存在を隠し、あたかもいないように振る舞ってきた障害をもつ兄弟姉妹、そして自分のことも肯定する転機ともなる。パートナーとの将来をより良いものにしていきたいという気持ちがある時に乗り越えていく発達課題のひとつとして、きょうだいに立ちはだかるものでもある。」また、パートナーに自己開示をするよりも以前に、親友にまずは打ち明け、そこで受け入れられた経験が励みとなって、パートナーに自己開示するというステップを踏んでいることも明らかになった（末田・抱井・沖潮，2016）。

その一方で、障害をもつ兄弟姉妹のことを含めた自分自身であると捉え、パートナーや周囲の人に対して、自己開示することに葛藤を抱かないきょうだいも中にはいる。それでも、今後将来を共にする可能性のあるパートナーに関しては、開示への葛藤はないにしても、開示のタイミング、伝え方といった、より具体的な方法において意識はするということも見えてきた。

（３）研究３：きょうだいの今後の生き方を検討する研究

研究代表者は、青年期からきょうだいに関する研究を実施してきたが、成人期に差し掛かってきたことで、家族のありようについても捉えなおす語り合いを、同世代のきょうだいと共に行なった。そこで明らかになったのは、障害のある兄弟姉妹に対する親の対応が、きょうだいである自分のそれとは異なっていることに納得のいかなさを抱えるという側面であった。しかし、そのもとを辿って考えていくと、きょうだいは物心ついた時から障害のある兄弟姉妹と共に生きてきたため、兄弟姉妹の特性にも柔軟に対応してきた。一方親は、それまで定型発達の人との関わりが中心であり、子どもが生まれたことで障害のある人とのつきあいがはじまったということで、つきあい方に難しさを抱えることもあるだろうという想像をきょうだいはしていた。また、今後も、少しずつ親が年齢を重ねていくことで、親の抱える難しさをきょうだいがカバーしてい

くことも出てくるのだろう、と想像していることも明らかになった（沖潮・丸吉，2023)。

＜引用文献＞

Charmaz, K.(2006). Constructing Grounded Theory- A Practical Guide through Qualitative Research. Sage.

Ellis, C.(2004).The ethnographic I: a methodological novel about autoethnography. AltaMira.

Flick, U. (1995). *Qualitative forschung.* Rowohlt Taschenbuch Verlag Gmb. (小田博志ほか(訳). (2002)質的研究入門――〈人間の科学〉のための方法論. 東京：春秋社.)

Fontana, A., & Prokos, A. H. (2007). *The interview: From formal to postmodern.* Left Coast.

原田満里子・能智正博. (2012). 二重のライフストーリーを生きる: 障がい者のきょうだいの語り合いからみえるもの. 質的心理学研究, 11, pp.26-44.

Hodapp, R. M., Urbano, R. C. & Burke, M. M. (2010). Adult female and male siblings of persons with disabilities: findings from a national survey. *Intellectual and developmental disabilities*, 48, 1, 52-62.

川西千弘. (2008) .被開示者の受容・拒絶が開示者に与える心理的影響：開示者・被開示者の親密性と開示者の自尊心を踏まえて. 社会心理学研究 23, 3, 221-232.

北村弥生. (2008). 特殊なニーズのある子どものきょうだいに対する支援―第１回総論. 厚生労働, 2008 年 7 月号, 52-55.

鯨岡峻. (2005). エピソード記述入門　実践と質的研究のために. 東京大学出版会.

松尾純子. (2010). 体験を語り始める. 質的心理学研究, 9, 6-24.

McLeod, J. (2001). Qualitative Research in Counseling and Psychology. Sage.

Meyer, D. (Ed). (2009). *Thicker than water: essays by adult siblings of people with disabilities*. Woodbine House.能智正博. (2011). 質的研究法. 東京大学出版会.

沖潮満里子（2020）対話者のありようを見つめなおす―研究者と対話者双方の経験から―. 日本質的心理学会第 17 回大会シンポジウム「対話的自己エスノグラフィにおける対話者の存在」話題提供

沖潮満里子・丸吉南海（2023）障害者のきょうだいによる新たな親理解―成人期きょうだいの語り合いから. 日本質的心理学会第 20 回大会ポスター発表

大倉得史. (2008). 語り合う質的心理学―体験に寄り添う知を求めて ナカニシヤ出版

Schulman, G. L. (1999). Siblings revisited: old conflicts and new opportunities in later life. *Journal of Marital and Family Therapy* 25, 4, 517-24.

やまだようこ.(2000).人生を物語る―生成のライフストーリー. ミネルヴァ書房.

末田清子・抱井尚子・沖潮（原田）満里子（2016）構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析事例－二つの視点・二つの理論. 青山国政経論集, 96, pp.25-57

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 沖潮満里子	４．巻 262
２．論文標題 ケアを必要とする人の家族支援(1) きょうだいの経験から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 肢体不自由教育	６．最初と最後の頁 36-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 沖潮満里子	４．巻 263
２．論文標題 ケアを必要とする人の家族支援(2) きょうだい支援の実際	５．発行年 2024年
３．雑誌名 肢体不自由教育	６．最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 沖潮　満里子	４．巻 24-2
２．論文標題 自身をまるごと使う臨床そして研究	５．発行年 2024年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 207-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 沖潮満里子・登藤直弥・金重利典	４．巻 12
２．論文標題 NICU卒業生の発達の予後ー新版K式発達検査2001にもとづく定量的検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 子育て研究	６．最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24719/jscr.k12002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沖潮満里子	4．巻 20
2．論文標題 アジアからの質的心理学をうみだす	5．発行年 2021年
3．雑誌名 質的心理学研究	6．最初と最後の頁 336
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 沖潮　満里子	4．巻 41
2．論文標題 質的研究における対話の可能性ー方法の探究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 湘北紀要	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 沖潮（原田）満里子	4．巻 27,2
2．論文標題 障害者のきょうだいが抱える揺らぎ―自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し	5．発行年 2016年
3．雑誌名 発達心理学研究	6．最初と最後の頁 125-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11201/jjdp.27.125	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 沖潮（原田）満里子	4．巻 8
2．論文標題 対話的実践における〈あいだ〉の記述―語り合いと対話的な自己エスノグラフィを通して	5．発行年 2016年
3．雑誌名 質的心理学フォーラム	6．最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24525/shitsuforum.8.0_23	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末田清子・抱井尚子・沖潮（原田）満里子	4．巻 96
2．論文標題 構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析事例―二つの視点・二つの理論―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 青山国政経論集	6．最初と最後の頁 25-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34321/18893	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 沖潮満里子・丸吉南海
2．発表標題 障害者のきょうだいによる新たな親理解―成人期きょうだいの語り合いから
3．学会等名 日本質的心理学会第20回大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 沖潮満里子
2．発表標題 ケアする人もケアされる社会を目指して―特別支援教育の現場の声から考える―
3．学会等名 トヨタ財団 2018年度研究助成プログラム「障害者を援助する人々のメンタルヘルスの支援の検討」研究成果報告シンポジウム
4．発表年 2022年

1．発表者名 沖潮満里子
2．発表標題 きょうだいの生きるありようとケア
3．学会等名 東京大学大学院教育学研究科附属心理教育相談室 第18回公開講座「ケアする人をケアする視点」（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Nochi Masahiro, Yokoyama Katsuki, Okishio Mariko, Otaki Reiko, Omi Yasuhiro, Hirotsu Yumiko
２．発表標題 What are the subjective conditions that support the care and support of people with severe disabilities?— For Dialogue to realize a symbiotic society
３．学会等名 11th International Conference on the Dialogical Self（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 土倉英志・青木美和子・南部美砂子・沖潮満里子
２．発表標題 フィールドでの経験と研究（シンポジウム指定討論）
３．学会等名 日本質的心理学会第18回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 沖潮満里子
２．発表標題 対話的自己エスノグラフィにおける対話者の存在（シンポジウム企画・司会・話題提供）
３．学会等名 日本質的心理学会　第17回オンライン大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 若子静保・沖潮満里子
２．発表標題 対話的自己エスノグラフィにおける「気づき」ー兄を小児がんで亡くした妹の語りからー
３．学会等名 日本質的心理学会　第17回オンライン大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 沖潮（原田）満里子・能智正博・石島照代・横山克貴
２．発表標題 障害者のきょうだいが生きる二重のライフストーリーにおける「ドミナントストーリー」の検討
３．学会等名 日本質的心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 沖潮（原田）満里子
２．発表標題 他者との関係性を記述する自己エスノグラフィの可能性（シンポジウム指定討論）
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 沖潮満里子
２．発表標題 文化心理学とオートエスノグラフィ（シンポジウム指定討論）
３．学会等名 第１回TEA国際学会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mariko OKISHIO
２．発表標題 Living with Double Life Stories: In-depth Conversations between Siblings of People with Disabilities
３．学会等名 (25th International Conference on Social Science and Humanities（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 沖潮満里子
２．発表標題 当事者とその周囲の関係をこわし・つくる　精神科デイケア通所者、トランスジェンダー者、自閉症スペクトラム者の妻から（シンポジウム指定討論）
３．学会等名 日本質的心理学会　第14回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 森口佑介・登藤直弥・日高昇平・中村友昭・鈴木宏昭・沖潮（原田）満里子
２．発表標題 ベイズと認知発達入門（シンポジウム指定討論）
３．学会等名 日本心理学会
４．発表年 2015年

１．発表者名 川島大輔・沖潮（原田）満里子・谷山洋三・李フ昕・川野健治・松嶋秀明
２．発表標題 災害による傷跡とレジリエンス―東北における、あるいは東北についての対話
３．学会等名 日本質的心理学会
４．発表年 2015年

１．発表者名 沖潮（原田）満里子
２．発表標題 自己エスノグラフィ入門
３．学会等名 日本質的心理学会第12回年次大会　チュートリアル
４．発表年 2015年

１．発表者名 Masahiro NOCHI, Mariko OKISHIO
２．発表標題 Revising a life-story as a dialogical process: Qualitative analysis of an auto-ethnographic project
３．学会等名 The 8th International Conference on the Dialogical Self
４．発表年 2014年

１．発表者名 抱井尚子・末田清子・沖潮（原田）満里子
２．発表標題 構成主義的なグラウンデッドセオリーの方法
３．学会等名 日本発達心理学会第26回年次大会　チュートリアル
４．発表年 2015年

〔図書〕　計8件

１．著者名 伊藤正哉・山口慶子・ 榊原久直（編）	４．発行年 2023年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 256
３．書名 心理職の仕事と私生活　若手のワーク・ライフ・バランスを考える（担当：コラム５：私たちに潜む差別的な感覚－臨床と社会）	

１．著者名 中島 由宇・沖潮 満里子・広津 侑実子（編）	４．発行年 2023年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 330
３．書名 これからの障害心理学	

１．著者名 能智正博・大橋靖史（編）	４．発行年 2021年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 327
３．書名 ソーシャル・コンストラクショニズムと対人支援の心理学 ： 理論・研究・実践のために（翻訳担当：第１章　ソーシャル・コンストラクショニズムと心理学）	

１．著者名 サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 272
３．書名 質的研究法マッピング（担当：3-8自己エスノグラフィ）	

１．著者名 川島大輔・松本学・徳田治子・保坂裕子（編）	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 148
３．書名 多様な人生のかたちに迫る発達心理学（担当：コラム15障害児者のきょうだい：二重のライフストーリーを生きる）	

１．著者名 伊藤哲司・呉宣児・沖潮満里子（編）	４．発行年 2018年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 210
３．書名 アジアの質的心理学	

１．著者名 栗田佳代子、吉田塁、堀内多恵（編）	４．発行年 2017年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 280
３．書名 博士になったらどう生きる？	

１．著者名 鈴木聡志・大橋靖史・能智正博（編）	４．発行年 2015年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 235
３．書名 ディスコースの心理学（担当：第８章対話プロセスとしての自己の語り直し	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関